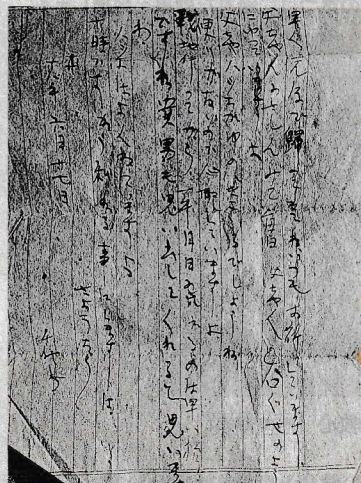


窓

アツツ島 届かなかった手紙



佐野六三さんとチヨさんの結婚式の写真＝1941年、佐野ハツエさん提供



佐野チヨさんから夫へ送った手紙は、届かずに戻ってきた

(後藤遼太)

きっかけは、アイスキャンディーだった。佐野六三さんは、古新聞を運ぶトラック運転手で、まじめと評判。酒は飲まず、甘いものには目がなかった。取引先業者に若い女性が入り込んでいた。社長めいのチヨさんという。人なつこい笑顔が気に入らないはずがない。ある夏の日、チヨさんがアイスキャンディーを会社に持ってきた。「はい」と一渡し、会話が生まれ、恋に落ちた。1941(昭和16)年3月、東京の下町で暮らし始めた。六三さん24歳、チヨさん22歳。恋愛結婚が珍しかった頃だ。ささやかな生活の外で、世の中は少しずつ変わっていった。小学校は

国民学校になり、軍事教練が始まる。ジャガイモや卵が配給制になった。米英と戦争が始まったとラジオが告げた。12月8日の早朝だった。やがて赤紙が届き、六三さんは兵隊に取られた。そして文通が始まる。《兵隊は昼のつかれで静かに眠って居る。一人々々が故郷の妻、子供、兄弟の夢を見て居るのである。かすかないびきが聞えて来る》

残されたチヨさんのおなかには赤ちゃんがいた。入隊の2カ月後、吉報が六三さんに届く。《女の子が生れたとの事 飛び立つ思ひで読みました。元気でないてる声が此処まで聞へる様な気がする》六三さんは筆まめだった。月に2通も3通も、手紙やはがきが届いた。《固くく抱いてやりたいよ千代子よ。君も体を大切にしてくれ》

軍の検閲を避けるためか、慰問団に託された手紙にはこう書かれていた。《若い自分たちにとつて戦争は実に無情だ》入隊から1年後、「北海の島」に行くと言った。後、便りはめっきり減った。数カ月後、新聞の1面に記事が載った。《アツツ島に皇軍の神髓を發揮》「山崎部隊長ら全將兵 壮絶・夜襲を敢行玉碎」

アツツ島は、北太平洋のアリュートン列島の小島だ。ミッドウェイ海戦の大敗で、約2600人の日本兵は孤立無援に。そこに4倍以上の米軍が上陸し、部隊の生存者は20人余りだった。世間は「軍神部隊」とたたえた。六三さんがその一人だったと知らせたのは、3カ月後の素っ気ない死亡通告だった。《全員絶海ノ孤島ニ散華セラレ御遺骨ノ収容ハ不可能ナル状況ニアル》



佐野ハツエさん 5月24日、千葉市

「こんなにもポロポロになるまで。父を忘れられなかったのね」今年5月、父が亡くなって80年になった。手紙の束を見返していると、母から父への手紙が、一通だけ紛れ込んでいた。《ねては夢おきてはうつまぼろしの、思は貴男の事ばかり(略)このさびしいきもち》

《便りがないので心配していますよ。戦地行っているから、一月月日の流れるのは早い物ですね。ハツエはよくねていますよ。十時ですから私ねる事にします。さようなら》

玉碎から1カ月後の昭和18年6月27日の日付。六三さんに届かず、戻ってきた手紙だった。